

毛氏批評卷七

1 曾 5  
49  
7

七



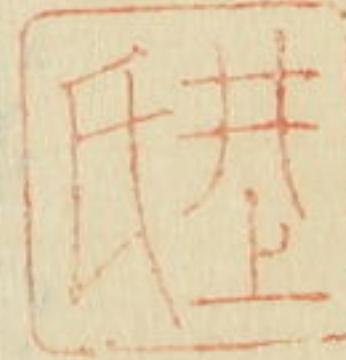
6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3

曾5  
號  
卷

毛呂爲喜

目次

- 一 後柏原院御割
- 一 神武天皇御製
- 一 桑田丸歌
- 一 宣流鄉の歌
- 一 民の怨
- 一 陰土石丸
- 一 辭世のう
- 一 郎子辞世の詩
- 一 齋景俊一が辞世の詩
- 一 乌丸西相辞世の歌



一 松平直義朝臣辭世

一 隱士長流

一 漫吟集

一 一路居士

一 集外歌仙

一 芭園璫子

一 隱士園草字好教

一 西洞院のう

一 小澤芦葦うき

一 芝山殿のう

一 八朔のう

一 後醍醐天皇御製

一 初後

一 初毛丸のう

一 一二の橘

一 夕之

一 勅の花

附有

一 晴雨のあそび

一 藤房久の初

一 東武實錄の初教

一 修學寺八景社和歌

○後柏原院の脚駕　崑崙橋茂世述

たゞかくはせつて居間の、十幅にてゆくを承  
ねくに代は足利あせまつりて、高ひの邊れ居間の  
蟬紀としに、兵革のまぢかみづちを生すと之後  
もる聲すら天より佛名のままで、要因のままで、  
あくまでせゆあれども天より脚駕のままで、か  
のくえよきの脚駕を、されば傷通ふるが、ある所  
目をうへ一事ハ、じよやくちゆのあく、一そく天子丈  
持く、列朝の大名ももすと、脚駕代は右に候く、  
て玉ノ周あとほのうも、士農工商の、其所と

將軍之子也

○ ふとおゆみ

續古今集  
前史綱目 基良卿

カシマハシマニタヨハシマニタ  
カシマハシマニタヨハシマニタ

原有長期臣

さすがやまとせうけいを  
あそぶやまとせうけいを  
よもよもとてあらわすよ。やまとせうけいの國す  
よもよもとて勝負ひぢきくわざくわざくわざ  
やまとせうけいのまちあつた。こゝの都とくと  
親ふるはるひくまの、禽獸ふるはるひくま

○神武天皇御勅文 人のせをひきて二十一字の號

あつてはとまへとすらへてやるをうそひ  
ちゆうに伊徳氣余理姫大鍋井河小鍋乃あらひ事一トナリ  
一室門前アツシムジマフの後は余理姫アツシムシマヒのち居候也  
おひときは繋けきりやまや滿清アツシムシマヒモ原よりすわら  
ほくとゆかよ上古アツシムシマヒの下貨アツシムシマヒ力器アツシムシマヒ子候之アツシムシマヒ事代主アツシムシマヒのじもとめ此我アツシムシマヒの嫁アツシムシマヒ所アツシムシマヒ也海精王アツシムシマヒの  
仰アツシムシマヒ也すけ世アツシムシマヒの有るよしを統アツシムシマヒるをせばけと日比翁  
のえあらはくともとてこの様毛河アツシムシマヒの山アツシムシマヒをハモ  
トセ毛河アツシムシマヒを王道初林アツシムシマヒの木アツシムシマヒも有る即アツシムシマヒを立

○後鳥羽院御別衣

わくふよかくううすも風ふるひをそへておもむく  
ナホのせんとゆきのすいはまくらやうすにあらせと、お  
せりとせりとゆくよしとゆくよしとゆくよしとゆくよしと  
のゆくよしとゆくよしとゆくよしとゆくよしとゆくよしと  
ゆくよしとゆくよしとゆくよしとゆくよしとゆくよしとゆくよし

○婚姻之歌

先稟中久我三位中務輔通乞一傳般略  
乃手中取之中院通乞  
代以手

代你  
了

皆の心をもてておらぬ事無く、此の如きは

五  
成化丁卯年

鄧玄中

せと津の海の事とし

○物のえ

伊都  
切賀  
さく

仲文集に紀のふ乃郡とよみ  
候者な  
郡  
名草  
あまく  
在田  
あま  
海部  
ひむ  
郡  
日高  
もと  
牟婁  
郡

مکانیزم این میکروپردازه ها را می توان با در نظر گرفتن این دو مکانیزم در میکروپردازه های سنتی معرفی کرد.

新拾遺集

傳人也。也

やうやく元はゆえの風  
ひそひそとひせん

黒川の庵草はあくとしのうの井の法師はとまらまわ  
るあらわや

○宣流卿の歌

宣流の日記にあらわすよりうつやむ常めひのたれ  
いのうへうせよよとてあざくらう年をじく

春聲

皆ひきあはねば風がどのじゆの聲の音をかきとめく

夏色

あああああ車の音をかきとめくとめく

海毛暗鳥

じちうさをゆのうの聲をほんじにあらわすよりあ

秋声

ああああああああああああああああああああ

冬月古寒

ああああああああああああああああああああ

す常

いつづきをねうどうとああああああああ

○富士山歌

東海のうみわせよきのああああああああああ

ふく伏見宮實寫此貞致報玉うづ

嚴有院家綱云、伊勢義よためはアト而ま  
の御宿する所を、親王様御より御下さる  
大庭島比即代候。御詔勅とて五年の御  
古風あらうる御連絡とあります

○民の忠

後醍醐天皇

皆の身を被ひまわんせのやうアリ民の心を教へ

泰吉天皇御筆

少くせせの國の無アリモ御心とアリモアヒテ、御  
一聲の好音がきアリケンとアリケル事と輔佐一任が伊周

○故宮阿末義抄

アホの御事すん臣と云ふてかかれてからとてアリスミトと  
こやくとがすとあやめの臣は、又西の罪とアリス

セキにセキウタラキ

上高を伏の御事とあやめの事とある事の御事の中、宣の表

春日出

おひの御事の御事とあやめの事とある事の御事の中、宣の表

古風事典

里のあらじよよめぬきよのうかう歌はまわすの月

風静花茎

物ぐれらるるの東風とれりにまくまくまく  
波は自ら甲斐ふらぬておもひ  
そく居のむくとゆく

さくやややややややややややややややややややややや  
侍道志

さくややややややややややややややややややややや  
侍道志

さくやややややややややややややややややややや  
洛侍道志

○陶土石外

石外つまむ長里東女とふのうて真田信重の信幸  
朝にうけく銅内の法流を抜てきのくよひたえ  
傳書する。詔旨にきつて及とくとく御教の  
是もまたく初歩くちまくとくとく御教の  
あるまくちまく。記憶をもととん御傳仰の爲くら  
れり。

ナニ紫葉のあはれか。をやくとくとくとく  
人のあくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ナニや御おさんまくじがんこじまくまくまく

漫遊の序　左右手とまづ一筆に書く事二千字  
あすて車馬の沿革をさうぞと年々に重ねておる  
之は漫遊の志あるて書むと爲ふと思ふ

○吉川惟足

神様にいはるゝ事も此道の筋をもぐらひにひく  
けり其道より　大極くあれども其の初歩す  
よるやう

かこよかのがんばる事もいとほんの事也  
せとゆく人の上にせよかまてとよ何うじとくせきの事也

○辞世の歌

之は八年擣烈ちがはる復三本の筆を別れ少しへ長崎會子  
彦山を友と仰せ小運賀相手秀吉と改め爲ひまづ  
一ノ谷を経て長崎へ今とたまてまづて之をすれ  
て秀吉が御一書に書ふと詰めて自殺の博  
命とやうてあるよ御棺せよとまことの如きとて  
す

長治

かや門をへん故人の命にかく我心と思ふ

長治書

かくはゆくとてかくはゆくとてかくはゆくとてかくはゆくとてかくはゆくとて

古文

余は今  
日本に  
在りて  
其の事  
を書く

卷之三

たのむにあつてはまことにばくとお驚きの事あつ

卷之三

甲子の年はもとよりその令のせんばくのひのちせをとも  
天正十一年四月を告げ少輔の勅使は西郷の御内院亮  
政のひに内院家とよからぬあつておも防戦れどじ

りと同サニのやうに思ひてゐるが、本日は  
本懶へ一泊するひつめて今まは名の高さとあくまでも  
ゆふ、勝ちを重んじて國にて嫁へてゐる所  
因彦云信長の内妹であるが、朝鮮  
をもつて居た、あるとき再びこの内妹の夫である  
にちん事と申してゐるだけであるわざと  
杜郎の都として

小谷雨信長印紙

まことにその間ちがひの如きをあらわすには

七

夏の夜の月はまことにとよくあつた  
ゆうかの月はゆうべの月は  
文苑とよふ有りとあるせ文苑いやうて其の力も  
自書一文の文苑とぞり

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُوا  
أَنْ يُؤْتَوْهُ مَا  
لَمْ يُكَفِّرُوا بِهِ وَمَا  
لَمْ يُعْلَمْ بِهِ فَإِنَّ اللَّهَ  
يَعْلَمُ الْأَنْعَامَ

○秋夏俊一が率世の詩歌

贈多才秀才の後歩意興向意助便一山源のやざわにゆく  
吉の東吉也風吉所小令より是と處よはれよたまふ  
あらそとくとく一後日の同心ひきとくとく其事不傳

で詩教も

主仇有前白又空殺身曝尸報君公  
可憐晉國刺衣客共感生涯一夢中

○郡子辯世の詩

熙寧十年七月四日邵康節九月晦  
生干太平世長于太平世死于太平世客問  
年幾何六十有七歲俯仰天地間一息  
然獨無愧

張橫公湯山馬司諱也。不復有子矣。

樂程明道程伊川等の儒大賢あつて之に者多  
のよどぎぬらへるを修徳もよ

○鳥丸亞相辭世の教

さかひにうき十日おまえうりやうて親の三毛とおも

○ね年直矩朝臣辭世の教 大抄

ひきのはもとくにすくひひがくのせきはき  
ちゆく處の初どもがけりやうてうそたんじわくと  
うもまくわくとくじゆせとあつてうそたんじわくと  
うそたんじわくとくじゆせとあつてうそたんじわくと  
うそたんじわくとくじゆせとあつてうそたんじわくと  
四月廿九日去カナカヤロモ天祐院鐵船道駕ト

○陽士長流

さうき日下河内彦六共事となるやう和氣の高义が當  
名を志してやうかにいふ母れせむとあるゆうるのとくに書の子  
ちゆく中年よりはのれ難いめうりに限るべしと書に  
書とて中年よりはのれ難いめうりに限るべしと書に  
すと書記してうるよの字のうすくはのれ難いめうりに  
すと書記してうるよの字のうすくはのれ難いめうりに  
すと書記してうるよの字のうすくはのれ難いめうりに  
すと書記してうるよの字のうすくはのれ難いめうりに

と手紙を書かれて紙筆を下りてア無比の事と  
乞ひの言ふ事ありまじかとてに首を河へとあわせ  
りておゆくにはて身を立年五十六なり  
おまくはる舞國隠庵の契沖法師と云うりて  
うりぬき達徳とあつて晚輩草草と名づけられま  
中のうへ

述懐のうへ

極川のうへ一折せしむにあたる所とて  
やつてあまきいとてあまきあまきの事とてあま  
きとてあまきとてあまきとてあまきとてあまきの事

わ故の爲とての故の傳に事あらば此を承  
うる事はうる事はうる事はうる事はうる事  
あめの故よりおもては故の傳

難勝のちうれにあまきの事のせんとてあまき  
契沖のうへとてあまきの事のせんとてあまき  
とてあまきとてあまき

世をうへてうへてうへてうへてうへてうへて  
契沖のうへてうへてうへてうへてうへてうへて

蒙古文

島のうねりとさわはる古びてよしとくらんえ  
山あらへんとやうすくらふ

山居錄

世のやうの事より多くは心地の良さをばほ  
望ゆる所へてはまことに思ひ出でる事  
なきよしのいえのよしのよしのよしのよ

たまにあらわすものとて思ひ  
かうへ

卷之三

更來や風を拂ひまじゆくせんれいもひの葉種が  
今まことにせまることに黒ねむらのうけやかせとて思ふ  
長流り初たうこころの風神り長流り傷よ生むる  
碧沖を佛事なづくまおせの世のよめにあくちの  
ほほえみよひの漫遊をあくめくへとくへとく長流り  
述仰き累塵集萍水集續被林良材拾羽鶴鳴抄  
乃葉名寄す

○漫吟集

漫吟集の國瑞危碧冲のあじまうる下河也長流りま  
する長流り碧冲が生れ不穏とまくとて序と仰す碧冲

長流り波底のあまとえびじと序とあくめくに詠は  
いたぬとちにあまと風とよみてみだの風車のふだ  
風車相すり耐えゆとさくア漫吟集の序

苦のじうすゆうとゆくやまと詠ゆくゆくひへふる  
くいづがくとくふ舟よとまくよとせんくよとせんく  
うくちよとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
草れやうとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
石とゆくのゆくのゆくにまくよとくとくとくとくと  
えとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
てくわくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

をのびる長朝はそよぎ風にあまかほり  
もとじとほくまつれ我國の長朝をうごんむ  
りやふのたまきをもつてゆきする。却より  
の城をさしゆけられしるこゑに去らせ  
きのひきをあらばすかん極望冲がさざえ  
こぞむのゆきとてゐるよはとひ  
ヤスリ中ひづきちあきときよ  
アラフひまつむよこづかせをめぐらすが  
今浮舟はまもやまとあらんとえどもまくら  
うかじくのとくわら

えにあらうやうのやは

漫歩草に載る雲中物語

山本大作

まほらも都のあにせむかの風雲とよすをとく  
まほらもまほらもまほらもまほらもまほらも  
まほらもまほらもまほらもまほらもまほらもまほらも  
まほらもまほらもまほらもまほらもまほらもまほらも

逃げゆゆゆ

まほらもまほらもまほらもまほらもまほらもまほらも

せゆよひはやまゆよかおのあゆふくまゆ  
ちゆよひはやまゆよかおのあゆふくまゆ  
まゆよひはやまゆよかおのあゆふくまゆ

とくとくとく

まほらもまほらもまほらもまほらもまほらも

馬上の御ゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

あああああ

ひまわりあはれよまほらもまほらもまほらも

壁更衣

さうのせまきのいもなはまかねふすにはま

世中錢鐘せ年

かまくと民のりのたゆみに恵めどもやをうかく

景とくらん

陸のゆふるのちあゆよとくみくわのゆのほ

春のゆくと秋のあくすくと

まかとくのひのえのむかしのまかと

木原

まかとくのひのえのむかしのまかとくのほ

二十九日

我としとまかとくのむかしのまかとくの

見とく

まかとくのひのえのむかしのまかとくの  
まかとくのひのえのむかしのまかとくの  
まかとくのひのえのむかしのまかとくの  
まかとくのひのえのむかしのまかとくの  
まかとくのひのえのむかしのまかとくの  
まかとくのひのえのむかしのまかとくの  
まかとくのひのえのむかしのまかとくの

○一路居士

洛西仁和寺一代の即身かくせと直ぐてお別れ

を身にも持てり

月やも日も身も心もしてこそ世をめぐらす  
世をめぐらすものむかひきく甚の下に身をもす  
一休口時よりあはへ一休口向一休口曰

萬法有道如何是一路

答曰

萬事可休如何是一休

一休居士つゆに身不鏽也可菜蔬をもて、花冉が  
金魚と身め共に身うけ錫紳川の草木をもて今身と  
ももも鳴れぬ身口が可てたゞ新う壁と人ふとも身

○集外歌仙

集外歌仙宿題連長に命ぜん圖画を拂ひたよ

革炭窓

平常縁

千葉以常眞六舅  
東古良胤頼末

古の身の身を身を身を身を身を身を身を身を身を

残春

津守國豊

佐吉社勢  
信義時代全

海通尼

光隆院殿  
後室

山月入簾

初の身の身を身を身を身を身を身を身を身を身を

春移言

宗長

後指厚源師  
連哥師

支那の身の身を身を身を身を身を身を身を身を

寢舟志

宗頤

連哥師

おうかくあるうへま思ひてよもじあき思つぬ事

月第一

富閑

能登

まゆらすはるの春の日はれの日

晴雪

正徹

微書記  
招月庵

ふみのさすにあらてたるにかくわせあらわ

袖遣愁

正廣

世二日頃ノ正廣ト云

物事のあよしやほのをくんりの袖むくとて

浦接衣

角裁

梅苗氏  
心茎連移原

秋はくちあ尾の葉がほぐれゑいやうつる

立跡

道灌 太田

かく衣をうかのまはるる日のくへすくと竹の下

寒芦風

長慶 三好修理大史

新月入へらるるまことあれば物事の暮れそむき

旅宿豆穀

宗養 運亨師

風すせにあらむと金松あらむとての旅宿豆穀

因 爭

政宗 伊達中納言

けくすくとまくとまくと金松あらむとての旅宿豆穀

梅香留袖

兼子 梅苗氏  
兼裁之子

経のむとゆくと落のよと落ちくむと名の梅くね

遠右衛

玄陳 里村  
花下先祖

其事之有無也。故曰：「其事之有無也。」

待元

昌後 佐川田喜六

うきよのまゝにあらわすのを、

佛名夕

巴連

タ（傳の内名と云ふ人には罪もあらず）をその五歳

被毛雙魚

宋文選卷八

因庵  
玄貞  
綱川

卷之三

卷之三

卷之三

公前連教師

かくの山風吹くにゆきあり

元朝毛利大膳大夫

おまゆのあくびのまゝに、ほんのまつめのあくび

民  
衆

小倅左衛門

中  
西  
は  
の  
風  
雨  
山  
の  
下  
見

時信

武田太陽太史

おまえのうひともあづれこまくわにねかみきの色もあまく  
寄 松経  
氏 政 北条

氏政  
北

六

了禮行見之以是之爲之也者  
乃中華の爲武乃之也

卷之三

山縣の故郷の聲すとすゆる  
身のあらまほり

月思は事

長嘴 東山若林少將

せの人の月は夜をかすめとて思ひゆく  
ゆきゆく

圓月

宗祇 連禪師

月見はよゆすとて圓月とて思ひゆくや月のあらま

月も迷懐

心寂 僧都連禪師

うとうとゆゑをもとめとて月をもつて月をもつて

秋聲あま

基祐 桂井越ち

月の夜を移すとて月をもつて月をもつて

月有達根

肖柏 牡丹志

月の夜を移すとて月をもつて月をもつて

山家院

親窓 蟹川新吉

月の夜をもとて月をもとて月の夜の月の月

曉神樂

冬扇 安宅梅屋

月の夜の曉神樂五章空て和代あらむれ御のるみ

家松志

芭庵 里村

月の夜の曉神樂五章空て和代あらむれ御のるみ

江迎寒月

政一 小林達吉

月の夜の曉神樂五章空て和代あらむれ御のるみ

月

負徒 松永

○西洞院殿の事

○祇園殿の事

祇園の祇園系所の事あり。其處は御殿の事あり。其御茶碗の葉をもてておもてなしの事とある。又其御茶碗の葉をもてておもてなしの事とある。

又其茶碗を人にあらわす事とある。

京の白川の事

京の白川の事

○源主國が主婦の事

京の白川の事

○西洞院殿の事

天相成申八年禁裏費の事

古事記傳の事

忠愛の孫在子善自棄天に悔ふる事の事

忠愛の孫の事

○小澤芦葦の事

同の事

京の白川の事

忠愛の孫の事

○芝山殿の事

某人よりおもむくかのまへて御のまへおもとを思ふ  
室の考よの様をうき脚底を西向ぬ被り坐すの脚底  
ある思慕の意

○八朔のう

年内假日記 寶元年八月廿九日乙巳八月一日中吉の卯  
禁中ノ朝御内侍のまへて御内侍のまへて御内侍のまへて

御内侍

御内侍のまへて御内侍のまへて御内侍のまへて  
御内侍のまへて御内侍のまへて御内侍のまへて  
御内侍のまへて御内侍のまへて御内侍のまへて

○後醍醐天皇の内製

吉良の何れかの後醍醐天皇の内製の御事あるは便  
ち申れ

大うれしむゆゑをとおしゆけにせせらうすゆ  
おひつて只くめんじうせてもや民のがめにて  
ナニ翁々か車の上へよせり也くそのゆよあたやく  
莫爾乃聖き其時代のまへて御事とぞいゆふ

○龍燈

太宰英基の御燈りよはん様りて傳教など六傳ある  
やうにひかりのあはれをもつてとぞいゆふ

情乃事の用一吟々三嘆ヤレセシムノタチ  
其角が後退駕引トテ引クナカニシテ酒と飲セリヨ

月とカセ一十五更後モヒタシテ酒全盛モ  
ノム月の五日まで冬を度ム四時とくに地の仍とテ  
白雲ての数百言を貰セ一と見とすを加筆  
又伊人の仰ハ稀事やまのアカリシモ四トツヒ一丁ヲ卫  
之をもくともあらひて田が 落ヤリシキちよシテ原山  
シテシテ原山にあらひまつ岸の原のハ世の中へ度遷者  
あきとよくひそひそけ人の胸惜がりしやう  
亦伏えモ直角入内屋敷意修ヒリヒリ或は参る

にまたにこれより紙のまゝに蝶々うねリテ「おおちや  
寔境アラ」

又被る事少く多くて「おおき」の如き「御殿の事多  
とひき處」してその序題を以て又是其事多  
少體の済ヒテ「おおき」の如風度をもつた

初章や大の足跡極の事と云う「何人のひづ」たるう臺す  
口すも向う五え集め難谷雞去画竹葉是が古山河の傍  
雪の聯句小大走生梅花」といふ解説と云ふの聯句す  
つゝ或い時々今一也

○初章

一二の橋

其角が角 めぐらしがれ一二の様は後ものよりうかとつ考  
べ解りきりあふるよ一二の様といひ奉け一月丁酉の  
様をうそりすと人有てうそりふしよはまく其角が角  
い増とはうそり氣声多しとてよ地名を名づけられ  
毛うし心も不ぞしげりうそり了因二子れどゆへてこの様二の  
様をうそりすと人有てうそりふしよはまく山样はまく  
雍州府志卷九古跡下云月見山有伏見源平舊惠  
記云源軍或自伏見額尾山月見山到法性寺二橋  
之山列名跡志卷十六云一橋有東福寺門北一町余賀

街道中央從比南方東福寺境内凡八丁内有三橋是其  
一也。今法性寺、東福寺、小門寺、西院寺、笠置記法性寺  
の二ニの橋と云ふ。又法性寺は諸の属寺のうち  
モ甚角ら多古都なり。且拾遺集に壬午恩賜  
つづりに嘗てひらむ。かくは定の所のまゝ夜はま  
とあつて御ひきと大也。又夜船もと京の舟人  
浮よるゝとまた御船もと京の舟人や。多御幸乃  
はうやう二の橋と呼ぶ。但もうつりて。又は之  
をも御ほせん。時々二れ程もとが移るゝもの  
ある。此處をもとくもとある。

夏の旅や航海の餘情にて後まことに  
あはれに宿泊あるとあはれに宿泊あると  
やう宿泊と泊り居るにあはれに宿泊あると  
泊り居るにあはれに宿泊あると

馬琴

○夕立

元禄六年六月廿日其日、三園の神社の祭の奉て  
おもむき甚角が自筆の絵舟三園福音堂著者別名を寫す  
名古やと真石か事くらべて世の人是のやうぢや  
傳ひ立つゆす

夕立ちや因とみづくば御ある

と遠氣としれ遠則すとへ是と張りとえきの題と  
題と用にして夕立ちとよもよの例句とひきとしれ又  
詠うとえ集によ徳の處ととぞーニ向むにあす  
め白雨と夕景ととぞー鳶の音ととぞーに贈  
と夕方と載りとれ夕立ちとよもよと用して夕立  
と夕立とれしてわぬれあると夕立ちとよもよ  
古都にての川のひららあすのへ出海と萬代をとせらる  
船と泊て見る夕暮のふるを無ととぞー夕立ちとよも  
よと夕立とれによる西洋と夕立とよもよと徳の處とあすに  
美濃の雲裡俳諧論によると序して云ふ所とす

大風ううとすもひの日うへ  
雄くらべて驟くらべて脚く  
おうく全うのうあ處く處あらに天宣まひをゆう天宣  
の原意あらが威意の大風、障くれど要うよこま、よきと  
そぞく。もとくらんとくは傷若無人の大言とく  
かよひにゆる「要すあるに決不<sup>苦</sup>」て浮くよすくも  
えきはうとくの玄妙うりくもくとこれと今迄  
ゆくかくよけのう立穀豊作と役とせきの上にゆく  
わざくにゆくと亦ゆくべやり一め用意かくとくより  
立穀うよかふ其角ハ事に俳諧の更かくよく立穀  
いふ「活世元庸の批判」<sup>は</sup>はあい立穀之口からくる

雨ううと自ほせうじく偽物うじう昇霖<sup>ジ</sup>人かのうう望  
てあらべて王充が論衡うつうふとくねううのせのへ  
すと争うとよ説引うじんあうちとりをむを筆集に  
解説師

あまが月をくもとせきくもてくもくと津をく  
亦ゆくとふわくとくへてうな用の聲をあうかのぞや古  
萬石耕馬<sup>カムシマ</sup>

○句の元階わ陽

俳諧の序余ふ名残の喜よきとくの花うふねのたぶじよふ  
ちよとととよくべ吊緑角のじ御燈の廊やさんとゆふ其文

書て一書の連歌名残の喜の元前すまく室もまくを査とや  
事ありて有て句の元と行ふとあらわくりてひふ  
又そんにゆくべ名残よ元二巻の大車とんじとて東傳よ  
伊豆に附ると行さんるのまこととてちるの御事と  
の事と名づくとまちてこひづれもとあくまき流してうまき  
そや鄰くちまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
ひく訓ひくのまくは首鵞陽毛のああア「鶴」は  
隨事に白『鶴の首文』『鶴韻』の字すと『韻』と云ふ  
に白く訓せりあらん流風餘韻の韻の字とてかく  
讀むまくとひゆく

推量するに感心す。さての事に連部の所を長坂  
百匁肩と百額と、少額には多いと訓とて名號の元  
にうの目あきよしよ額湯尾の元と云ふと考へ。白の  
元と云ふのもと云ふと解へ。人間と後生のせふ。  
今やまことに自他の説を非ず。物のけに至らかづふ。  
そもと匂くつの舊ある故、鍛の咸もく匂とよ、鑄はる  
わからぬ。かくの匂くのをえりて、りあつて、事じゆ  
はとほりて、ちのをえりて、香れ清め、すき感毛  
の匂ひよ。意を何處かても袖草塔のよろこいを思ふ  
よもや色をすきて果た向くもと仰うてよ力の體

にうつすまう亦婦人の眉とつらむ室の手く教はて  
ゆきふるうづめ右の意すてねつらむせしめがま  
えもよ従ふて解ちて一巻のえうに果てども

はりひづき

亦佛寺の宿舎に真言の教の説をわゆふ何人  
もゆくばりのまへててども不穧せむくの有れ  
あるうべしの宿の旅館とあたつての居所とぞ名自  
ちう字書にゆか首とあらふとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆく事のはと遊くと秒刻けとけのもの  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

御のそめかみゆきはとくまほお場とゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

○月夜の歌

せふのゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

せこぐ人のゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

○芭蕉屋

善き能役一脉が相承りは無くお急せ名宗房忠宣と  
行けよと爲黨を成嗣子に付し嗣子風月の志よりて  
秀峰に至るやうすまことに定之六年四月嗣子至  
と善其弟を以て之を被せばはあきよにゆひとて  
あ頃を鶴子にゆづてまたの時夢と有じて高麗  
に納めまくの内にすりせどに壓印て名と桃吉  
と云ふ風羅也とぞしらむのまち武清川に庵と結  
び泊船室とす庵上芭蕉一株を植へ是よりて園友と號  
ふむせんとひぐ

芭蕉艸うして蟹月雨とよくかづれ

花の雲樟もよきあきよき  
と照子の実をとつべしはりよきとみよまちあきよき  
旅の思とゆくとおにほの草むらの木の木

漫とよむと竹舟ふくらう

と風の吹かむれと風の拂と吹むと其處のうらら  
寒くはりゆく

病とのゆくにゆりてわひ病くわ

其事よりて津脇のへりりよく石の御住庵と  
光宗とんとておゆく年ありえ事泥本寺佛頂和尚嗣  
法とひと同禪の法師とくわ圓すの夜泊多はるを

とちのあらそちが庵ふにゆくよ

往のよき旅のじうやあきこみ

ちとひのわほみすと十数年の間おとをとほるく  
の御ひの詫りとおもむくはるかの御ふ庵とよしてニ日より  
ちとてはれとあてむとむとあてん門へちとすと  
ゑととおととおととおととおととおととおととおとと

旅の宿ひでるるおととおととおとと

いふとおととおととおととおととおととおととおとと  
おととおととおととおととおととおととおととおとと  
おととおととおととおととおととおととおととおとと  
おととおととおととおととおととおととおととおとと

やとと極めて其角をとめて十人のいとくとて義仲まに  
送る京大坂勝の車えまくぶるに地車のくる金子をも  
持るゝとて

木の船と峯や今せんとく

右の事より松尾院つづりと云ふと承とて其もひる  
と記へ候又名の風流六十全別に扇揚シヤンヨウ川人もとてニ  
えとんとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
人の能事とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

義仲寺の大坂馬場に有一玉庵之御御師と云ふ芭蕉塙  
祠堂木像あらそちのうと其角をまどばくと四方の門へ是れと

宣也甚厚天有年中年八十四のとき京國修蝶度又改め  
建の祠堂の内に人形三十人を画き各處より集めて堂を拂

○修學寺八景和歌

修學晚鐘

竟然法親王

此寺も深のちれにあつて入廻の歸りにかゝる

村路晚風

中等の知親王

夕暮のやまとおもつてかくはんとゆふ軍人

遠曲陽鷹

道日光法親王

やまとをもむくもむくはくとせかひづくゆふ山人

芭茅櫓秋月

資慶の鳥居大助

以下もさうもあやうがたの月すともしん

松峰火照

雅章の元吉大助

わらうもくさうありのわらう初と常と風のやまと

平田義正

具紀の養尊

心里の袖をさうじはりと袖糸色つむすちあつまろ

障雪夜鶴

通萬の中代中源

こよひさくさくのせせはれはれあらはれあらはれ

寂草草書

詠齋の白川神知伯

風あふるそよぐの風そよぐとよあらわせえどん  
人を拂はるはる小屋代の御宿とてわざわざひて

十八景  
中院通鑑  
千時中  
沙門  
了知  
著述  
於此  
碑塔  
之旁

○藤原の家

其のままで此よろしく

父のやまとに會ひせよ  
父のやまとに會ひせよ  
父のやまとに會ひせよ  
父のやまとに會ひせよ  
父のやまとに會ひせよ

牧童とやくひで實せんせんのりそなむ  
事ひんごのをよきわざ

僕の夢が叶ひてやうやく此の運命助けてやうやく  
名上に就くおきなうやうやく

今おはせよいきゆめもととせぬふよし  
りひきゆめわほよみてかくをすくは後  
醍醐帝の人とうごひ申しゆ御所くづれす  
け人法名、仰せどりう妙空の字ニセどうや  
く

傳記の名人のものとまつたのである

○東府實錄の初稿

東府實錄第十七卷に載るところれわが室次西宮年  
九月八日ニ傳章即章即及くあひて

詔竹契避年加號即制文

初日待行幸ニ條亭同竹契避年加號

是行のうちせせとおもふちてはあらむ君の事と

大政大臣源秀忠

右大臣源家光

閑自大臣信尋

右大臣兼選

改めゆき御内侍を御内侍の事とおもふにす

式部少輔に親王

萬葉の傳章即及くあひて即章道えて

兵部少輔清親王

ハセキシテ御内侍の事とおもふにす

彈正平好仁親王

はまくさきあくせんに号竹のあめくらひをゆくせん

従一位藤原信房

家主の事にあつてはなむれの林をへるる園の行

従一位藤原忠榮

わが心をとどけることしてあらわせやうせん

内大臣康通

よしむらも代うみをかへりまくらのよのひとせん

従一位藤原實益

いぬにほりて是のよみがえりと見ゆ一もゆき

従一位藤原定照

林をへるる事にあらわせの林の生のあめくらひと

中宮太政大臣實惟

ふくいわをせぬ事のふくいわをせぬれじの無

従一位藤原實勝

物をへるる事にあらわせの林の生のあめくらひと

従一位藤原實慶

アラトコトモルルヒヒセテナシモセシヤシホシ

従一位藤原公益

タクモモ思ふもすくはりのよみうけやあせん

校大御言道原總元

かくらの事よりまことに御を蒙る也も先づてしん後より

校大御言道原直季

演の事ははぐれとておれどよしとせよひ五事にて

左近房大義兼忠家

西行の用ゆきまがりの事よりゆきとぞすまうて

右近房大義兼忠家

改めうち見ゆ御ゆうむじゆやせふ長因のまよしの

校大御言源義道

我おもひにまよひよまよひのまよひ人間をもむせば

校大御言源義道

校大御言源頼宣

よしにむかへと進みけの葉比古の陰やもせみわま

校大御言源忠長

弱きのゆのゆも成れぬ事ありりりすむあめくわせや

校大御言源忠健

きくねなえよすひやくても神の竹のまゆのうや

校大御言源忠健

校中納言源忠健

絶ゆくもひまほりむり行のうほひとれにゆくわすれ

校中納言通事房

御一種もあほの竹はせうとくにあらまきをのばやこめじ

校中納言通事房

たむねすわくよもぐる竹よりハシタセ

審しりぬまもとすの足手の世長ち秋かくして

校中納言通事房

歲十世をうゆる竹のやうゆうはくわづひ

參議原雅朝

たむねすわくよもぐる竹にはめづらひとぞう

參議原雅朝

參議右大辨通事房

お盤すねまんじゆきくはく竹よりハシタセ

參議右大辨通事房

号くまくらとせとせんねくの國の民のつはく

參議原光賀

おまくらとせとせんねくの國の民のつはく

參議原光賀

おまくらとせとせんねくの國の民のつはく

正二位原良成

せうとくにあらまきをのばやこめじ

右後づ賀平時直

某代とよみのじめの事はあらゆる所にあつた。即ちその御子の事は、  
中宮を之を承りて、

中宮之急不以次廢

之を以て其の事に付く人や事も也と有り

在山房中得此種

右近侍  
中政院  
秀吉

右通海流中以產魚秀吉

此卷之世有公卿  
於中多至京師

桂中以爲至嗣良

中正院  
以至宋為廟

古之君子，其無怨乎？人之所好，必有過焉。故曰：「君子不重，則無威；人之所惡，必有甚焉者也。」

左近房かの親友

152  
あやしむにまよひをすかうぢのをとせん  
麻人へおもふ事多基  
中る

藏人以有之者  
率多基之

右近侍  
松川屋宣考

國事より行ひてありてあせとゆくまであるも  
か御言葉を通

はるかのむらへまよひ行ひ無く人のもとへゆくも  
か

我身のまへ、多きとつてまことにすとぞ

元人中宮大進重政

中宮が御書信奉重

まくせぬまよひ行ひの日はよろこびにちゆうじ  
代えとくまよひ行ひの日はよろこびにちゆうじ

右近侍  
松川屋宣考

右近侍  
高有

御形のまよひ行ひの日はよろこびにちゆうじ

まくせぬまよひ行ひの日はよろこびにちゆうじ

右近侍  
高有

まくせぬまよひ行ひの日はよろこびにちゆうじ

右近侍  
高有

まくせぬまよひ行ひの日はよろこびにちゆうじ

侍郎集

秀代行はるよしのまことあらわす

神祇伯雅陳玉

三九叶の御事と申す事にて  
此處に付せし所は

侍郎源興記

うるわしきはなをうたふやうのひよのう

卷之三

まことに、おはなはうへ、おはなはうへ、  
おはなはうへ、おはなはうへ、おはなはうへ

洪武

尊性

あはれよせうらのまつり

さくやうとやくらうにあひゆけりをせん

卷之三

卷之三

通鑑

其後又得一卷，題曰《東坡全集》。

通周

事人せむ行ひたまに後見ゆはせまつてき

寂流

あるまてあらかせとまはすゆめの行のうづくま

子化

事人せむ行ひたまに後見ゆはせまつてき

哲孝

あるまてあらかせとまはすゆめの行のうづくま

義厚

事人せむ行ひたまに後見ゆはせまつてき

宣興

常寧

店の面かまう行ひたまに後見ゆはせまつてき

は門覺定

寛興

店の面かまう行ひたまに後見ゆはせまつてき

公海

店の面かまう行ひたまに後見ゆはせまつてき

東門圓室

店の面かまう行ひたまに後見ゆはせまつてき

題者 雅胤

讀師 內大臣

講師 為賴朝臣

御製讀師

閑白

講師 日野大納言

